

人民解放軍と中国政治

―過去と現在―

林 載 桓

発展途上国研究に関する優れた著作に与えられる「発展途上国研究奨励賞」（アジア経済研究所主催）も今年で三六回を数える。今年、青山学院大学国際政治経済学部准教授 林載桓氏著『人民解放軍と中国政治…文化大革命から鄧小平へ』（名古屋大学出版会）および東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授 宮地隆廣氏著『解釈する民族運動―構成主義によるボリビアとエクアドルの比較分析―』（東京大学出版会）の二作品の受賞が決まった。去る七月一日、表彰式に引き続き林、宮地両氏の受賞記念講演がジエトロ本部で行われた。今月号と来月号にわたり講演内容を掲載する。

ただ今ご紹介いただきました、青山学院大学の林載桓（イム・ジエファン）と申します。このたびは名誉ある発展途上国研究奨励賞を頂きまして、誠に光栄に存じます。たくさん感謝すべき方はいろいろいらっしゃるのですが、まず選考委員の先生方、院生時代よりお世話になつて田中明彦先生と高原明生先生、それから、非常に丁寧かつ辛抱強く編集の労を取ってくださった三木信吾先生、また、一貫

して勉強の道を走っている私をいろいろ支援してくれたソウルの家族にも、この場を借りて深く感謝申し上げます。

今日の講演では、本の内容の紹介と、本から得られた知見が現状の中国政治と人民解放軍にどのようなインプリケーションを持っているのかについて、簡単に述べさせていただきます。

まず、この本は、文化大革命の

ときの中国政治を題材にして、特に、そのときの人民解放軍による大規模な政治介入が軍を中核とした統治システムへ発展していき、それが持続し、またそれが解消していく過程について新たに再検討を加えたものです。

当時の人民解放軍は、単なる介入にとどまらず、経済、社会、教育のすべての面で、実際に管理と運営の中核的役割を担いました。

中国政治の原理的な側面からみる

と、非常に異様な政治状況が出現していた時期です。人民解放軍の政治介入は一九六七年に本格的に始まり、実質的に解消されたのは一九七〇年代の後半です。一〇年以上にわたる、私からみると人民解放軍の統治、この本では軍部統治と呼んでいるのですが、その形成と持続、解消と消滅のプロセスを一貫したロジックによって明らかにすることが、この本の全体の趣旨です。

そこで、最初に二つの問いを立てています。ひとつは、なぜ中国において軍主導の統治システムが形成されたのか。中国は言うまでもなく、a Party state（党国体制）として共産党が政治の中心にある、共産党から政治的な影響力がヒエラルキー的に行使される政治体制です。その中に、なぜ軍が主導する統治システムがこの時期に形成され、それが長らく続いていたのか。それが最初の問いです。

もうひとつは、実際にこの軍主導の統治システムは、時間の経過とともに大きな変容を遂げていくわけですが、その変容プロセスについてです。特に、それがなぜ、またいかなるプロセスを経て解消されたのか、あるいは解消されて



林載桓氏（左）と長嶋ジェトロ前理事

いないのかということ、もうひとつの問いとして立てています。この謎解きに取り組む際に私が取った視点、それから立場は、まずは毛沢東の役割を強調することです。具体的には、軍の台頭における毛沢東の意図とその戦略に注目しました。もうひとつは、比較政治学における新制度論の知見を全面的に取り入れて、新しい分析

枠組みを構築して、この時期の中国政治の展開を説明することです。具体的に言えば、毛沢東と人民解放軍の関係がこの時期の中国政治を規定していたという仮説の上に、毛沢東を権威主義体制の指導者、それから人民解放軍を毛沢東が統治のために活用した執行の制度として位置付け、毛沢東と人民解放軍、言い換えれば独裁者と制度の関係という形で、

この時期の政治的な動きを捉えようとしたわけです。

そういった視点を取ることで、どういう成果を得たのか。大きく言えば、現代中国政治史、それから、最近欧米の比較政治学を中心に高い注目を集めている、比較権威主義研究（権威主義体制を比較して研究する分野）におけるインプリケーションが考えられると思います。

中国政治史の観点から言うと、文革研究においてまだほとんど解明されることがないのが、当時の人民解放軍の政治介入の実態です。実際に軍が政治と社会経済、それから大衆の中に入って何をしたのか。そして、文革期に起こったことに対して彼らはどういう政治的責任を問われているのか。それを実際に取っているのか。こうした点は、人民解放軍の組織史の観点からみると、最も暗鬱なところなのです。まだ誰も語ろうとしていない、隠れている歴史の一部分です。まさにその文革期の人民解放軍の政治介入の実態について、なるべく新しい資料、それから大量の解放軍幹部の回顧録を用いてその実態の解明に迫ったことが、ひとつの成果と言えるかと思っています。

もうひとつは、一九七〇年代の中国政治を体系的に理解するひとつの一貫した視点を提供できたと思います。ご存じのように、一九七〇年代の中国政治は、非常に激動の時代で、文革が七六年まで続いて、その中で林彪（りんびょう）事件があり、また六九年には中国とソ連の間で戦争の寸前まで行く状況が実際にあったわけです。その後、毛沢東が七六年に死亡し

て、華国鋒と鄧小平の間に権力闘争が始まるのですが、最終的には鄧小平が政治的勝利を収めて政権を掌握します。また七九年には、新しい改革開放時代の始まりを知らせるかのように中越戦争が起こるといって、一見するとよく分からない展開になっていきました。一九七〇年代のいろいろな中国政治の事件や新しい動きを一貫した視点に基づいて説明する、具体的には軍部統治をめぐる政治過程という視点を用いて一九七〇年代の中国政治を体系的に理解するひとつの手がかりを、もちろんひとつに過ぎませんが、提供できたのではないかと思います。

最後に、理論的には、本書で目指していたのは、権威主義統治における制度の意義について理解を深めることです。権威主義統治は民主主義統治と比べて、従来は実質的な制度的制約は存在しない、統治者を実際に制約する制度は権威主義統治においては考えられないという理解が一般的でした。しかし、実はそうではなく、権威主義体制においても制度はきちんと意義を持っているという話を、特に独裁者をめぐる制度的環境の重要性、また独裁者の意図と制度に



林氏による受賞記念講演

主義統治の本質は「強制」にあるのではないかと考えます。つまり、権威主義、指導者なり政権が自分の意思を社会に押し付けるための制度という重要性があり、最近の権威主義体制の研究においては、そういう視点がやや欠如しているのではないか。そういう問題意識に基づいて、本書では、権威主義統治の強制 (coercion) の側面を前面に出して、その強制の制度を実際に独裁者がどのように使っているか、また、どのような矛盾を持っているのか。独裁者の思いどおりに実際に制度が動くわけではないので、そういった問題あるいはジレンマがなぜ生まれるのか。そういった点に焦点を当てて理論的な枠組みを構築しようとしたわけです。

最後に、本書のインプリケーションです。文革期はあくまで七〇

年代の話ですので、既に三〇年がたっていて、七〇年代末から始まった改革開放も三〇年近くたち、大変な成果を出していますが、中国政治も、私の観点からするとがらっと変わったと思います。そういう面で、政軍関係に関しても、私がこの本で対象にした時代との比較で見れば、今の政軍関係は大きく断絶しており、大きな変化を遂げてきたと言えるかと思えます。まずひとつは、今の人民解放軍は、最高意思決定過程からほぼ完全に排除されているということですね。具体的には、九七年の政治局常務委員会における劉華清という海軍提督の引退をもって、中国共産党の政治局常務委員会には現役の軍人はいない状態が続いています。その下の政治局レベルでも、現役軍人は中央軍事委員会副主席の二人しかいない。つまり最高意思決定機構である常務委員会と政治局において、軍は二つのポストしか持っていないわけです。これはもちろん偶然起こったわけではなくて、軍に対する共産党の制度的な優位を実質的に保証するために進めてきた、ひとつの意図的なプロセスの結果であると言えると

思います。

もうひとつは、私の本で非常に重要な人民解放軍の特徴をなしていた、軍が実際に統治組織の中に組み込まれていて、軍にいろいろな役割が求められる状況です。単なる戦闘隊としての人民解放軍ではなく、経済活動もしなければいけない、あるいは大衆の中で共産党の政策なりイデオロギーを売り込む宣伝もしなければいけない。いろいろな政治的な役割、経済的な役割を求められていたのが人民解放軍であり、人民解放軍はそれを誇りに思ってきたわけですが、これが九〇年代半ばごろから大きく見直されています。特に九八年に、人民解放軍のいわゆる商業活動、企業活動が制度的に停止されるわけですが、基本的に今、軍は少なくとも製造業からは完全撤退しているとみえます。まだサービス業には関わっていますが、基本的に軍の経済活動は否定されているわけです。

もうひとつ重要な軍の役割として、社会治安維持活動への参加がありますが、この面でも最近、人民武装警察への大きな予算配分と、そのケイパビリティの向上によって、実際に社会で、例えばデモが起こったときに、人民解放軍が

対する戦略をめぐる理論的な検討として、それをなるべく明らかにしようとしたということが、最後の成果として挙げられると思います。

より具体的に言えば、先ほどの権威主義体制の制度に関しては、中国もそうなのですが、社会のいろいろな動きを取り込む手段として制度を使う。権威主義体制においても議会と政党が存在するわけですが、私はそうではなく、権威

町に出るといふ状況はほとんど起こっていません。人民武装警察との役割分担が制度的な形できちんとしてあるという観察ができてくるのですが、これももちろん偶然起こったわけではありません。共産党が、軍と経済、軍と市場、それから軍と社会との境界をなすべくはつきりさせようという意図の下で行ってきた動きです。

最近、習近平政権になって、あらゆるところで習近平さんが言っているのが、戦争ができる、かつ戦争に勝てる軍隊への転換です。

どの国の軍隊にとっても当たり前のミッションですが、これがいたるところで強調されていること自体が、人民解放軍の歴史的・制度的な性格を物語っているのではないかと思えます。その点で習近平さんは、昔ながらの人民解放軍の政治的な役割、経済的な役割、社会的存在としての人民解放軍の性格を変えようとしているのではないか。胡錦濤時代とはかなり大きな違いがみられるわけですが、こういう面で、彼が描いている、また推進しようとしている軍事改革の方向性にも、戦争ができる、戦争に勝てる軍隊への転換が大きく強調されています。それをみると、

やはり今までの人民解放軍の持っていた非常に特殊な性格がまだに影響を与えているということと、九〇年代後半から執行している軍と経済、それから軍と社会との線引きの作業が、まだ終わっていないということが言えると思います。ですから、今、人民解放軍と政治の関係は、大きな転換点、過渡期にあると思うのです。習近平の軍隊建設への新しいイニシアチブがどこまで成功して、それが制度としてどこまで定着するのかは、

依然としてよく分からない状況です。もう少し具体的な展開の内容をみないと、よく分からない段階にあるのではないかと思えます。そういう意味で、本書で取り上げた共産党と人民解放軍の関係、つまり、共産党が自分たちの政策やイデオロギーを社会において実現するために人民解放軍を活用する、つまり私がこの本で使った執行の制度としての人民解放軍の役割は、今ではやや否定されつつあるのは間違いないにしても、まだ組織として人民解放軍はそれを引きずっているわけです。そして実際に政治システムの中に、そういった人民解放軍の政治的特質が

まだ深く反映されています。ですから、習近平の軍事改革が非常に難しいのは、これが単なる人民解放軍の性質の転換だけではなくて、統治システム全体に関わる問題だからです。この統治システム全体における軍隊の役割を完全に否定し、また、その中で線引きをしなければいけないという面で、党と軍の中の非常に大きな抵抗に、恐らく彼は直面しているのではないかと思っています。

最後になりますが、これが、この本で描こうとした毛沢東の意図を反映するポスターです。真ん中にあるのが軍です。それから、革命幹部と革命人民です。ですから、軍と党と大衆人民が一体となって、これは革命委員会の権力構成なのですが、これが、つまり毛沢東が描いていた新しい統治システムの構成です。これが見事に失敗したわけです。ですから、私の論文が主張するのは、軍をこの体制の中核にして毛沢東は大変な期待を人民解放軍にかけたけれども、実際にやらせてみたら、うまくいかなかった。それは人民解放軍の組織的な性質からそうだったわけではなくて、毛沢東という独裁者と人

民解放軍という制度の間の一般的な矛盾、あるいはジレンマによってそうした現実になってしまったということが言えると思います。

ここに、習近平を入れてみるのはどうなのかということは考えられるのですが、今の中国の統治システムは決してそういう形にはなっていないと思います。習近平はあくまで共産党が選んだ指導者で、今、大きく変わってきているのは共産党と軍との関係です。この共産党の上に習近平が、超憲法的な存在ではありませんが、軍を統制している。そういう構図が多分描けるのではないかと思います。ただ、党からみてまた非常に難しいのは、軍と大衆人民との関係です。文革のときと全く同じジレンマですが、この中の関係、人民との関係、もちろん市場との関係も含まれるのですが、軍と社会との関係をこれからどう再定義あるいは再設定していくのか。そういう新しい課題に今、中国は、特に習近平は、軍改革を進めるに当たって、大きく直面しているのではないかと思えます。

これで私の講演を終わらせていただきます。ありがとうございます。